『WH氏の肖像』におけるプラトニズム——第２章を中心に

岩　永　弘　人

序

ワイルドの『WH氏の肖像』は、いろいろな意味で『ドリアングレイの肖像』と比較されるが、モチーフに肖像画が使われているという共通点はあるもの、小説としての完成度はかなり違う。客観的に見た場合、『WH氏の肖像』は小説として完成しているとは言い難いのである。（前川 140-141）

また、この小説のWH氏にまつわる文学的な探偵作業だけに限って考えても、内容的に首をかしげるような記述も多いし、その説得のやり方にも自信があるとは思えない。例えば「･･･であることは言を待たない」とか「･･･と考えないと理解できない。」というような、他の考えをまったく排除するような言い方。こういう言い方で読者が、自分の理論をすんなり受け入れると考えていたようには思われない。ダンソンの言を借りれば、この小説は「それが構築する理論を肯定すればするほど、それを否定している」ような印象を与える。（Danson 82）

このように、ジャンルのおいても、論理の展開においてこの作品は破格であると言えるが、その原因は何なのだろうか。彼がこの物語に異常にこだわり、『ブラックウッド・マガジン』発表後何年も加筆を繰り返していたという事実を考えてみる時、筆がすべったなどという事はありえないように思う。一番考えられるのは、ワイルドがこの小説の筋と同じくらいに、WH氏のモデル探しとその論証にこだわったという理由であろう。

ところで、この作品のオリジナル版に対する大幅な追加部分の中でも特に目を引くのは、第２章の終わりの、イタリアを中心とするプラトン的な友愛論と、第５章の終わりのダーク・レディ論である。ワイルドがこの作品を最初の倍以上に拡大し、この追加部にこだわった理由は、いったい何であったのか。その辺を探りながら、この小説に見られるワイルドのプラトニズム——特に、同性

愛との関連――を追求する試みをしたい。

本論ではこの小説の第２章の終わりの、プラトニズム的友愛を賛美している部分に注目し、そこにあらわれてきている「知的な美」(intellectual beauty)という概念について考える。その際特に、ミケランジェロの詩について述べている部分に注目したい。

1

まず、第２章の終わりを詳しく見ておこう。

この章では、「私」がウィリー・ヒューズ説に取りつかれ、その説にしたがって『ソネット集』を再び読み直す過程が描かれており、その際「私」なりの解釈もつけ加えられていく。そして「シェイクスピアがソネットそれ自身について語っている詩行と、自分の偉大な劇作品に関して語っている詩行とを分けることが、いかに容易かということもわかった。」(CW1167) これはワイルドのマウスピースとも言える「私」が、『ソネット集』の中からウィリー・ヒューズに関する部分をピックアップしようという強い意志の現われとも言えるし、一方では読者を説得するための苦しいストラテジーとも読める。

この後、彼は役者としてのウィリー・ヒューズの存在を強調するために、彼の演劇人としての心象風景を描いていく。そして、ウィリー・ヒューズは「私」にとって、「一種の霊的な存在、つねに支配的な人格」(CW1169)になっていく。

ヒューズの性格について述べられるところでは、ソネットの93番を引用し、「君が心で何を思い、外見が心でどう動こうとも／君の顔はただ美しさのみを語るのだ。」とドリアンを思わせる描写を取り上げる。「ウィリー・ヒューズの＜移ろいやすい思い＞や＜偽りの心＞のうちには、俳優の特色であるすぐに世に認められたいという欲望や、もて囃されることを好む性質と同じく、芸術の性質に分かち難く結びついている不誠実さのあることが容易に認められる。」(CW1171)

締めくくりとして「私」はシェイクスピアの『恋人の嘆き』を取り上げ、ヒューズを、さらにドリアン的なキャラクターに近づける。詩中の「若さが芸術のなかにあり、芸術が若さのなかにある」(CW1172) 若者が、彼になぞらえられているのである。

演劇というジャンルについて芸術の感覚的な要素を分析したあと、「私」は「サフランを撒きちらした舞台の上の俳優たちはある観点から見ると、「芸術」の最も完全な満足すべき手段と見なせよう。」(CW1173) と述べる。言うまで

もなく、『WH 氏の肖像』のおける、ワイルドの『ソネット集』解釈の大前提は、この詩集の献辞にある WH 氏は（一般に考えられているように）シェイクスピアのパトロンなどではなく、彼の劇団にいた少年俳優であるとする説である。（この説は、実はワイルドのオリジナルではなく、すでに他の学者によって提唱されたものであった。）この少年俳優説を前提にこの小説の筋は展開していくわけだが、この説についての議論・論証が、大幅な増補といえる第２章の後半部でなされている。ワイルドは主に２つの理由でこの説に魅力を感じ、ここに増補を思い立ったものと思われる。１つには、演劇という媒体が五感のすべてを用いた芸術の形式である、という事実。今１つの理由は、シェイクスピアとこの少年俳優が、単なる劇作家と俳優を超えた、友愛でつながっているという点である。もちろん同時に、この芸術形式がもつ弱点――芸術と現実の距離が近すぎるという弱点――も見逃してはいない。しかし「私」は、シェイクスピアはその天才故にこの弱点をも凌駕したとする。

彼のこの演劇論は――この章のこれ以前の部分で、かなりなされていたという事実もあって――ここでは、これ以上展開しては行かず、ワイルドが重きをおいているのはむしろ後者の、シェイクスピアと少年俳優ウィリー・ヒューズとの友愛についてである。つまり、いくら戯曲が完璧な芸術様式だとしても、この２人の深い魂の交わりがなければ、偉大な劇作品は生まれなかったということである。この小説の語り手である「私」の言葉を借りれば、ヒューズという人物はシェイクスピアの偉大な＜自分の空想の翻訳者＞であった。そして、「事実、友情はそれが情熱的でないにせよ、喜びの微妙な要素だし、芸術家の仲間同士が抱く最も高尚な基本的な感情なのだ。」(CW1174)

「私」はこの後、フィチーノの『プラトン注解』をはじめとする、新プラトン主義とそのイギリスへの影響について言及する。「この素晴らしい対話、プラトンの対話の中でもおそらく最も完全なものといえようが、これはまた最も詩的なものであって、男性たちのあいだに不思議な影響を与えはじめ、彼らの言葉や考え方、生き方などを多彩にしていった。魂における微妙な性の暗示において、愛に関するその知的な熱中と肉体的な情熱のあいだに興味ぶかい類似を指摘することにおいて、また美しい生きた肉体の中に「イデア」の受肉化を想像し、努力によって新しいものを生み出す精神的な考えの具象化を見ることにおいて、十六世紀の詩人や学者を魅了する何かが、この中にはあった。」(CW1174) フィチーノへの言及は、第５章のはじめにもある。（これも加筆された部分である。）「私はまるで、情熱に満ちた友情の秘密の秘密、すなわちマルシリオ・フィチーノが我々に語ってくれた、美を愛する心と愛の美しさ、へ

と導かれていったような気がした。」(CW1194)

それ故「私」は、当然シェイクスピアもプラトンの影響を受けていて、特にその産婆役としてのディオティマの役割に注目して、有名な 116 番（「心と心の結婚に･･･」）や詩集冒頭の結婚を勧めるソネット群も、それは実際の結婚ではなく、魂同士の強い結びつきを示唆しようとして書かれたとする。この後でミケランジェロの詩について言及されている。ここでは、「私」によって２つの詩が紹介される。その１つに関しては具体的な作品はあげられていないが、トマッソ・カバリエーリに対して捧げられたものであるとされる作品群についてであり、今１つのソネットも同じく男性に捧げられたものである。（後者については、次章で詳しく述べる。）

そこから「私」の男性同士の友愛の正当化のために、いろいろな人物の名前があげられる。モンテーニュ、ユベール・ランゲ、フィリップ・シドニー、ジョルダーノ・ブルーノ、リチャード・バーンフィールド、フレッチャー、ピコ・デラ・ミランドラ、マルシーリオ・フィチーノ、ヴィンケルマン、等々。

そして、この章の結論はウィリー・ヒューズのうちに「シェイクスピアは、自分の芸術表現のために繊細な楽器を見出したばかりでなく、理想美の目に見える体現を発見したのであり、さらにイギリス文学の浪漫主義の風潮は、同時代の作家たちが愚かにも記録することを忘れたこの若い俳優に、負うところが大きいと言っても言い過ぎではないのである。」つまり、楽器と音楽を区別しないという発想と同じである。ただ、このあたりもかなりこじつけめいていて、ワイルドの中で芸術の正当化と同性愛の正当化が渾然一体となってなされているように思われる。

ヴィクトリア・ホワイトは「何てことない女たち――オスカー・ワイルドの作品におけるミソジニー」で、ワイルドが女性への蔑視の反動として、性をもたない関係の最高の形式として同性同士の愛に価値をおいた、という主旨のことを述べ、その後にリチャード・エルマンからの引用をしている。(White 161) それは、女性たちが美しいと言った友人に対してのコメントである。「よくそんなことが言えるね。女は美しくなんかない。彼女たちは何か別のものだよ。趣味よく着飾り、宝石をつけたりすれば、立派には見える。でも、美しくは、ない。美とは魂の反映なのだから。」

ワイルドは、女性というものに対する対立概念として、ウィリー・ヒューズという若い男性俳優にこだわったのではないだろうか。

2　ミケランジェロ

さて、上に述べたようなワイルドの同性同士の友愛について、ミケランジェロの存在は特に大きいと思われるので、ここでは彼のソネットを見ながら、ワイルドのミケランジェロ観を探ってみたい。

ワイルドはいくつかの重要な箇所で、ミケランジェロに言及している。たとえば『ドリアン・グレイの肖像』の 10 章では、

> The love that he bore him for it was really love had nothing in it that was not noble and intellectual. It was not that mere physical admiration of beauty that is born of the senses, and that dies when the senses tire. It was such love as Michael Angelo had known, and Montaigne, and Winckelmann, and Shakespeare himself. (CW97)

この引用で、目を引くのは「知的」(intellectual) という言葉であるが、これは次章で詳しく考察することにしたい。

もう１つミケランジェロの名前が出てくるのは、ワイルドの裁判での弁明の際に自分の正当性を主張した時である。そして、この『WH 氏の肖像』でもミケランジェロの詩が紹介されているというのは、決して偶然ではないだろう。

ところで、シュローダーも指摘するように、ワイルドのミケランジェロへの傾斜は J.A.シモンズの著作によるところが大きいし、時としてワイルドはシモンズの文章をそのまま『WH 氏の肖像』に引用している。(Schroeder 21) ミケランジェロのソネットがシモンズによって翻訳されたと言う事実は、それほどワイルドにとって大きな事件だったのである。

ソネット、同性愛、と来れば、人は当然ミケランジェロとシェイクスピアの『ソネット集』を思い浮かべる。たとえば、ヴァリオラム版の『ソネット集』の注釈には、何度かミケランジェロの名前が登場するが、この点に一番関与の深い部分は、２人のソネットを比べて、「２人が２人とも、ソネットで名声を得ようとはしていない。両方とも出版する意志はなかったのであるから。２人とも、ペトラルキズムのモデルに啓発された。･･･〈中略〉･･･両方のソネットが若い男性にあてられたもので、このような物はイタリアには多くイギリスには少ない。」と述べている部分であろう。(Rollins 151) イタリアには多く、イギリスには少ない男性の男性へのソネットにワイルドが引かれたのは当然のことである。すなわち、ワイルドがあえてシェイクスピアの『ソネット集』を取り

上げ、そのインスピレーションの源であるWH氏のモデル探しをしようと試みた時点で、すでにミケランジェロの名前が彼の心にあったということは十分考えられるし、彼の念入りな加筆修正も首肯できる。特に、その加筆部分にミケランジェロの名前があるという事実は注目に値する。

ところで、先に概観した２章の終わりでワイルドは、ミケランジェロの２つのソネットについて触れる。その１つは、「私」の口からは、「カバリエーリ侯爵に向けて書かれたソネット」としか述べられていないが、その作品群の代表作の１つである 105 番に次のような一節がある。「感覚に属しているのは、愛ではなく、歯止めのきかない欲望であり、その欲望は魂を殺すのだ。だが、我々の愛はこの点では友情を完璧なものにし、さらには死をきっかけに、天国でそれ以上のものにする。」このソネットは、J.B.リーシュマンが『シェイクスピアのソネット集の主題の変奏』の中でシェイクスピアとミケランジェロを比較する際に取り上げているものである。(Lieshman 121-2) このミケランジェロの詩が、プラトニズムの本質を言い表しているという点については説明の必要はないであろう。すなわち、カバリエーリ侯爵の類まれな美は、もちろん美それ自体としても存在意義はあるが、さらにその先にある神との結びつき故にさらに価値あるものとなる――プラトンのいうアナムネシス――という発想である。

もう１つ、今度はワイルド自身が引用しているのは、次のソネットである。

開かれるとそれは、きみにとって天国であり、生命そのものでもあった、
あの美しい眼を、私がはじめてみるや否や、
最後の出発の日に閉じられて、
彼は、神への瞑想をするために、天国でそれらの眼を開いた。

僕は実感し、泣くのだ。その眼の美しさを、
僕の心が楽しむのに遅れたせいではない。
むしろ、時期尚早な死によって、僕の燃える欲望を満たす事が
できなくなったことが原因だ。きみは、そうではないだろうが。

それゆえ、ルイジよ。もし、僕が話題にしているあのチェキンの
類まれなる姿を、生きた石の上で永遠化するために、
その彼は、この地上の我々の間ではもはや土になっているが、

もし、人が別の愛する人に転身するものなら、

彼なしには、芸術はそこへたどり着くことはできないから、
彼を描くのに、きみをなぞらえて描く必要がある。(193 番)

この詩は、ミケランジェロの友人ルイジの、親戚の若者チェキンが亡くなった時に書かれたものとされる。チェキンは誉高い美少年だったらしい。このソネットは一種のエレジーの体をなすが、詩のトーンは嘆くというよりは希望を感じさせる。チェキンはミケランジェロと深い知り合いになる前に死んでしまった。それ故、第２連にあるように、ミケランジェロは彼の両の眼を見たいという欲望――プラトン的にみて、視覚は一番主要な感覚であるのだから――から離れらない。セステットでは亡き人の永遠化の話になるが、まずルイジ自身はその心にチェキンの姿をしっかりと留めているから必要ないだろうが、とした上で、彫刻による永遠化を約束する。そしてその彫刻を彫る際に、ルイジの姿になぞれらえて作ればうまくいく、とする。

このミケランジェロのソネットについて、ワイルドはほぼシモンズをそのまま引用する形で、次のように述べる。「精神的でなければ、愛は意味がない。愛する人の魂の中に不滅性を見つける形式としてしか美は意味がない。」(CW1175)

ところで、このソネットを読むと即座にワイルドの小説のモチーフにもなっている、シェイクスピアの『ソネット集』が連想される。シェイクスピアが、いつくかの点でミケランジェロの影響を受けているという考え方は定説といってよいが、このソネットだけに関して言うと、主に２つの点でそれらは類似している。①芸術による美（美しい人）の永遠化が、主題であること。②友人の親戚の若者(16 才)の死を嘆くに際して、その外見的類似性を強調している点。（シェイクスピアの１番から 17 番参照。）

①については今さら説明の必要がないほど、当時のソネットでは当たり前のテーマであった。ミケランジェロとシェイクスピアの違いは、のみを使うか、筆を使うかという点だけであった。ワイルドもこの小説の中で引用している、シェイクスピアの 55 番「大理石も、金箔を張った記念碑も」は、ミケランジェロを意識したソネットと読む事もできる。

②についていうと、そこに感じられるのは血のつながり、しかもよき血のつながりである。『ソネット集』冒頭の詩、「最高に美しい人間から、最高に美しい人間が生まれるのを期待する。」は同じ詩想を持つと言える。ちなみに、「転身するものなら」という言葉は、原語では'si trasforma' である。つまり、愛する人は仮に自分が愛するものが死んだとしても、その相手と一体化する事が

可能であるという考えに基づいている。

このように、ミケランジェロのソネットは、ごく自然にシェイクスピアのものを想起させ、それがワイルドがこの小説を書く大きなきっかけになったと推察される。そして、そこにあったのは単なる二元論では説明できない、微妙な肉体と精神の関係であった。

3　「知的な美」

以上のように見てきて実感できるのは、ワイルドの論証において、ペイターの影響――特に『ルネサンス』の影響――の大きさである。それは単なる二元論ではなく、芸術にとって魂（soul）や精神（spirit）というものが、そこでいかに重要な役割を果たしているかを強調している。この事実に関して第２章の中で特に注目すべきだと思われるのは、「知的な美」(intellectual beauty)という語である。

ここで問題になるのは「知的」という言葉の意味であるが、シュローダーはこれがミケランジェロを反映しているとし、次にあげるソネットについてのシモンズのコメントが引用されている。まず、その問題のソネットを挙げてみる。

以前いた場所にもどるために、
不滅の魂は、きみの肉体の牢獄にやってきた。
まるで、慈悲に満ちあふれる天使のように。
それはすべての知性を癒し、世界に名誉をもたらす。

このことだけが僕を燃え上がらせ、僕の愛を呼びおこす。
単なる外面的な美、きみの晴れやかな顔が理由ではない。
その中に徳が住んでいる愛は、
刹那的なものに、強い希望は持ったりしない。

自然が苦労して生み出した、優れた、類まれなものでも、
このようなものだ。それは天が、
彼らが生まれる時に、気前よく与えたものだが。

しかし、神はその徳高く、死すべき運命のヴェールをまとった者の上に最もよくその姿をあらわすのだ。

そして、私がそれを愛する唯一の理由は、
そこに神が映っているからなのだ。（108 番）

魂の牢獄としての肉体、刹那的なものへの決別、相手の男性の美に自分が引かれるのはその背後に神を見るからだという理論など、一読するとすぐにわかる典型的なプラトニズムの詩である。本文４行目の「知性」が目を引く。

「知性」と日本語に訳してしまうと、理解できなくなる言葉'intellect'についてもう少し考えてみよう。この語は、単に理屈による理解、とか、思慮深さとかいう意味ではなさそうだからである。むしろそれは 'intellectual'という形容詞の定義 '2. Apprehensible only by the intellect or mind, non-material, spiritual; apprehended by the intellect alone (as distinguished from what is perceived by the senses), ideal. Obs.'（*Oxford English Dictionary*）に近いのではないか。つまり、外的な美を讃美する上で、いわゆる「感覚」で美をとらえて、その美に耽溺しているだけではなく、そこに何らかの意味―― ミケランジェロの場合は、神――を見出すことができるのが「知性」ではないか。この考え方は一見美そのものの価値を低めるようにも思えるのだが、実はその美に意味づけをし、永遠化することにつながる。それは、美を分析することとは違う、もう少し、霊的な、神秘主義的な色あいを持つことになるのでないか。すなわち、「知性」とは本来神の属性であり、それと同じもの（あるいはそれに近いもの）を人間も神に付与してもらったという考え方である。

その意味では「知的な美」は、ワイルドの初期の詩「エロスの庭園」に出てくる「美の聖霊」と極めて近しいものと言えるだろう。関係ある箇所をいくつか指摘しておく。

（18）
美の聖霊よ。もう少し留まってくれ。
死んではいない。あなたの信奉者たちは。
少ないが何人かはいる。あなたの、輝く微笑みが、
1000 もの勝利よりも、ずっと望ましいと思う人が。

（21）
だが、留まってくれ。というのは、おまえが最も愛した少年は
――その少年の名前だけで、お前を留まらせるのに十分な記憶であるが――
静かな休息のうちに、ローマの壁の下で眠っているから。

また、調べは今も、自分の最も甘美な竪琴の死を嘆くから。
アドーニスのリュートも、その調べをつま弾く事はできない。
（その調べは）彼の唇と共に消えてしまったのだから。

（33）
美の聖霊よ、だが少し留まってくれ。
盗みをはたらく、市場の商人たちは、
鉄の道で、我々の美しい島を汚して、
旋回する車輪で、芸術の四肢を壊している。
ああ、群れをなす工場は、
魂を殺すトカゲ「無知」を生み出すが・・・。ああ、少し留まってくれ。

（38）
どうやら、これらの新たなアクタイオンは、
美を垣間見たと、豪語するのが早すぎた。どうだというのだ？
虹を分析したからといって。月から
最も昔からある、最も貞節な神秘を、奪い取ったとしても。
最後のエンディミオンである私は、希望を全て失うしかないのか。
粗野な目は、僕の恋人を望遠鏡で見るのだから。
（下線部筆者）

イゾベル・マレーによれば「美の聖霊」という言葉は、シェリーの詩「知的な美へのオード」で使ったものをワイルドが意図的に用いたらしい。(Murray 195)　特に 38 連の「虹を分析して云々」は、シェリーそのままである。ここでの文脈は明らかで、現代文明、とりわけ科学の微視的な分析主義が批判されている。

先にあげたシモンズのコメントは、この詩の傍証にもなる。「[このソネットは]、ミケランジェロが知的な美の崇拝に捧げている、強烈で宗教的な熱の強さを実証するものとして、特に価値がある。彼のみが、官能性とアニミズムの時代において、肉体という形式を貫き、それが内に幽閉している神的な概念を求めた。」(Schroeder 25)

ちなみに、このコメントと『WH 氏の肖像』の文章は、ほぼ同じである。ワイルドの「知的な美」がここに拠っている事はいうまでもないであろう。そして、彼が求めた美の形もここにある。ただし、それが純粋に美を求めようとした営みであったのか。それとも、自分の同性愛に対する正当化を計るための手段だったのかは、にわかに決め難い。ただ、再びダンソンの言葉を借りれば、この小説が、「＜不自然＞ではなく、＜倒錯＞でもない、男性同士の愛という概念」を正当化し、納得のいく説明をしようとする試みであったことは確かである。(Danson 81)

結論

最後に結びとして、ワイルドもこの小説で言及している、マルシーリオ・フィチーノの『プラトン注解』（邦題：『恋の形而上学』）からの言葉でこの論を閉じたい。

> プラトーン派の人の主張によれば、天使の内部にあるこのような絵姿が範形であるイデアなのであり、魂の内にあるのが理念としての観念、この世界の物質中にあるのが形相といわれる類型なのである。この絵姿はこの世界の中にも見られるが、魂の中にあってはさらにはっきりしているし、天使の知性の中では最もはっきりしている。神の容姿は唯一だが、それが順番に並んだ三個の鏡の中に次々に写し出されていくのである。この三個の鏡が天使、魂、この世界の物体である。･･･（中略）･･･したがって、天使の神聖な知性は、どんな肉体の力にも妨げられずに我が身に映しみて、その奥深くに描きこまれている神の姿を発見し、それをほめたたえ、それにいつまでもすがいついていたいと乞い願うだろう。この神の姿の好ましさこそ我々が美と名付けるものであり、神の姿にしっかりとすがりついていたいとする天使のこの願いは、我々が愛と呼ぶものである。（左近司 104-105）

『WH 氏の肖像』の３人の登場人物たちとウィリー・ヒューズとの関係を、『ソネット集』の詩人とそこに歌われる WH 氏との関係になぞらえることは可能であろうし、そこに刻まれている感情はともに疑いもなく、上にあげたようなプラトン的な「知的な美」であり、「愛」であった。

*テキストは *The Complete Works of Oscar Wilde* (Collins, London and Glasgow, 1988)を使用した。(略称ＣＷ)
なお、和訳は井村君江氏のものを使用させていただいた。(但し、文脈に応じて多少の変更を加えた。)

Works Cited

前川祐一　『イギリスのデカダンス』　晶文社　1995
大橋洋一監訳　『ゲイ短編小説集』　平凡社　1999
井村君江訳『W・H氏の肖像』　工作舎　1989
マルシーリオ・フィチーノ　左近司祥子訳　『恋の形而上学』　国文社　1985
ウオルター・ペイター　富士川義之訳　『ルネサンス』　白水社　1986

Beckson, Karl. *The Oscar Wilde Encyclopedia.* New York : AMS Press, 1998.
Danson, Lawrence. "Oscar Wilde, W.H., and the Unspoken Name of Love" in Jonathan Freedman ed. *Oscar Wilde: A Collection of Critical Essays* 81-98. Prentice Hall, 1996.
Dowden, Edward ed. *The Sonnets.* Folcroft Library Editions. London : G. Kegan Paul & Co., 1979.
Dowling, Linda 'Imposture and Absence in Wilde's "Portrait of Mr.W.H." ' in *Victorian Newsletter* 58, 1980, 26-29.
Ficino, Marsilio. *Commentary on Plato's Symposium on Love.* Trans. Sears Jayne. Connecticut : Spring Publications, 1985.
Leishman, J. B. *Themes and Variations in Shakespeare's Sonnets.* New York : Harper & Row, Publishers, 1961. 2nd ed. 1963.
Linscott, Robert N. ed. *Complete Poems and Selected Letters of Michelangelo.* Trans. Creighton Gilbert. New Jersey : Princeton University Press, 1963.
Michelangelo. *The Poems.* Trans. Christopher Ryan. London : J. M. Dent, 1996.
Michelangelo. *The Sonnets of Michelangelo.* Trans. J. A. Symonds. London : Vision Press Ltd, 1958.
Michelangelo. *The Sonnets of Michelangelo.* Trans. Elizabeth Jennings.

London : Allison & Busby, 1969.
Murray, Isobel. *Oscar Wilde: Complete Poetry.* The World's Classics. Oxford : Oxford University Press, 1997.
Pater, Walter. *The Renaissance.* London : Macmillan & Co. Ltd, 1873. London : Fontana / Collins, 1961.
Rollins, Hyder Edward ed. *The Sonnets.* Volume II of A New Variorum Edition. Philadelphia : J. B. Lippincott Company, 1944.
Schroeder, Horst. *Annotations to Oscar Wilde, The Portrait of Mr W.H.* Braunschweig: privately printed, 1986.
White, Victoria. 'Women of No Importance: Misogyny in the Work of Oscar Wilde' in Jerusha McCormack ed. *Wilde the Irishman.* New Haven/London: Yale UP, 1998.